

紙の忠魂碑

市町村刊行の従軍者記念誌

一ノ瀬俊也

Paper Monuments to the Loyal War Dead

はじめに

- ① 日露戦後／第一次大戦後の従軍者記念誌
- ② 追憶を語る兵士たち
- ③ 満洲事変／日中戦争期の従軍者記念誌
おわりに

【論文要旨】

各市町村における従軍者記念誌は、日露戦争終結直後、戦死者が忘却されていくことを嘆いて作られた。だが第一次大戦後、主には郷軍人会市町村分会によって作られた記念誌は、そのような後ろ向き意図ではなく、ある積極的な政治的意図、すなわち過去の栄光の記録・記憶化を通じて軍人という自己の存在意義を再確認し、反軍平和思想の盛んだった社会に訴えていくために作られていった。そのような記念誌の中で日清・日露の追憶を語った老兵たちは、戦死者の壮絶な死を語って戦争の「記憶」に具体性を与えて、人々の共感を呼び起こす役回りを演じた。そうした語りのあり方は「郷土の英雄」を求める人々の心情にもかなうものだった。老兵たちが自己の従軍体験を語る際、確かに悲惨な体験も語ったものの、基本的には名誉心充足の機会として戦争を描いていた。そのような従軍者たちの「語り」を彼らの「郷土」が一書に編む時、彼らが国家の大きな歴史に占めた位置、役割の説明が熱心に行われた。それは

戦死者の死の「意味」を明らかにし、ひいては戦争自体の持つ価値を地域ぐるみで再確認、受容することに他ならなかった。

以上の過程を通じて、満洲事変勃発以前から、満洲は「血をもって購った」土地であり、したがってその権益は擁護されるべきという論理や「社会主義共産主義」の脅威が市町村という末端レベルで繰り返し確認されていった。満洲事変に際して軍、在郷軍人会などが国民の支持を調達する際、日露戦争の「記憶」を強調したことは周知のことだが、本稿が掲げた諸事例は、そのような「記憶」が当時の社会において具体的にいつから、どのようにして共有化されていったのかを示すものである。

はじめに

近年、忠魂碑に代表される地域社会の戦没者「慰霊」が注目を集めている。確かにほとんど全ての市町村が独自に忠魂碑を建てたということは、地域社会が兵士の死に対し何らかの「慰霊」の必要性を認めたことの証左ではあるだろう。だが忠魂碑の碑文を眺めただけでは、地域社会と軍隊・戦争との関係性のありかた、つまり兵士たちの「郷土」が戦死者の死を具体的にはどのような論理で意義づけていたのか、そして同じ戦争から生還してきた者の「勲功」を具体的にどう捉え、賛美していったのかが見えづらいように思う。それらを総体的・通事的に問うて初めて、市町村という末端レベルにおける戦争の意義の捉えられ方、すなわち各時期の社会が有していた戦争観のあり方を問うことができるのではないか。

そこで本稿が注目するのが、日露戦後以降の各市町村——在郷軍人会分会が編纂主体となることが多い——において刊行された種々の「従軍者記念誌」である。この種の書物は、以下詳しく分析していくように、その地域出身の生者・死者を通じた従軍者一人一人の「功績」を顕彰する目的で作られたものである。

本来地域社会における戦没者の顕彰とは、生還者に対するそれと不可分、同時に行われていたのである。ただ、一九二六年奈良県のある在郷軍人会分会が編纂した従軍者記念誌⁽¹⁾は、口絵写真として分会旗を、次いで村忠魂碑、各戦没者、最後に編纂委員（分会会員）を掲載しているし、戦死者の死の状況を生還者に詳しく語らせてもいるなど、死者の顕彰に努めている。この意味で各地の記念誌を「紙の忠魂碑」とも呼ぶことができるのではなからうか。以下それらの内容を分析し、兵士たちの「郷土」が彼らの「事績」——その「労苦」や死——をいかに顕彰していたの

か、戦争それ自体の意義を具体的にどう認識していたのか、そもそもなぜその時々社会はそうした記憶の動員を必要とし、実施していたのか、という問題を明らかにしていきたい。

そもそも「歴史的記憶」が有した政治的・社会的機能とは、近年の歴史学全体において注目を集めている問題である⁽²⁾。日本近代史の分野でも、羽賀祥二が、一九世紀の地域社会における史蹟（長篠合戦などの古戦場）顕彰を分析し、大正・昭和戦前期においても、かかる史蹟とそこでの死没者に「国民教化」装置としての役割が与えられていったと述べている⁽³⁾。だが日清・日露以降という同時代の「戦争史」が、市町村という兵士たちに最も身近だったはずの「地域」社会において記録・記憶化され、繰り返し語られていったことの意味に関しては、近年活発化している「軍隊と社会」の関係性という問題意識に基づく研究や、戦死者に関する種々の「語り」に関する研究においてもさほど注目されていない⁽⁴⁾。また、従軍者記念誌編纂の主体となることの多かった在郷軍人会に関する諸研究でも、こうした分会——地域レベルにおける「戦争史」の顕彰作業にはふれていないようである⁽⁵⁾。だが国民・社会に「戦争を納得させる論理」とは何だったのかが問われつつある今日、そうした切り口から末端レベルにおける「軍隊と社会」との関係性を追求していくことも必要ではないかと考える。

① 日露戦後／第一次大戦後の従軍者記念誌

1 日露戦後における記念誌編纂

日露戦争終結後、全国の県・郡レベルのみならず、各市町村でも独自に区域内の従軍・戦死者の功績を讃える目的で記念誌が編纂されている。例えば埼玉県北足立郡川越町は一九一〇年、『明治三十七八年戦捷

記念帖』を編集、従軍・戦没者の動員・帰還・論功行賞に至るまでの履歴を掲載している。同書は序文にて「抑モ日露戦役ハ有史以来未曾有ノ大戦ニシテ殊ニ優勢ナル敵軍ハ天險ニ拠リテ防御ヲ固フス之ヲ攻ムル素ヨリ難シ而モ戦ヘハ必ス捷チ攻ムレハ必ス取り遂ニ遠ク敵軍ヲ北方ニ窘迫シ載史以来ノ大捷ヲ収メ以テ国光ヲ四表ニ輝カシ国威ヲ世界ニ揚クルヲ得タリ」といい、「川越町戦時一般ノ状況」と題して戦争中の同町における種々の後援活動も詳述している。こうした構成のあり方は、町民一人一人が前線兵士、「銃後」の一員として一致結束、「載史以来ノ大捷」獲得という国家的事業に寄与し得たことを自ら再確認・賛美したい、というナショナリスティックな感情に基づいていたとみられる。

だが、そうした感情に基づく兵士たちの顕彰は、その後も永く継続されていったのだろうか。このことを考えるうえで、川越町の『記念帖』よりやや後の一九一二年、福井県遠敷郡国富村在住の沢崎水哉（秀善）なる人物が非売品として刊行した『明治三十七八年戦役遠敷郡出身従軍殉難士記念帖』なる書物は示唆的である。同書は五二八頁に渡る大部のもので、戦争の起因から各戦場における戦闘の状況、〇六年五月二日「靖国神社戦死者大勅祭」までの経緯を詳述、その中に同郡出身の戦死者名・履歴などを「仮令ば遼陽役殉難者を一括して即ち遼陽戦記の後に入れ」て掲載するという構成をとり、戦争という大きな歴史における死者たちの位置、すなわち彼らの死の意義を明確にしようと試みている。

沢崎の同書刊行の意図を冒頭の「自序」からみていこう。彼はたまたま遠敷郡最初の戦死者（軍艦初瀬乗組員）の葬儀に会し、以後「万難を排して東奔西走（郡内全一二三名の）各英霊の葬儀に会し、都度英霊に對し黙約するにその勲績表彰に全力を尽さん事を以てした」という。「東奔西走親しく各遺族に就き生前の動作なり書簡なり夫等断片を集拾〔中略〕或は死者が竹馬の友に或は戦友に或は近隣にあらゆる手段方法を採」ったという献身的行動の背景には、「出征将卒が献身的行動の結

果は未曾有の大捷となり其大捷は更に帝国の世界に於ける位置に深甚なる影響を与えた」と、無名戦死者への深い謝意があった。

だが沢崎は、「今回靖国神社に合祀せられたる忠魂六万余知らず何人其姓名を記憶するものぞ〔略〕官報の校正掛りは之を一読したるならん町村役場吏員は之を記録したるならん而も彼等は何れも雲烟過眼なるべし何ぞ況や一般国民に於いてをや」、「花落ちて而後其凋落を憐むなく人逝て後世之が弔祭を怠る所謂熱し易く冷め易きは人情の状態動もすれば我が五千万同胞に代り戦捷の犠牲となりし忠烈義憤の健児を日常記憶の中より遺忘し去るの傾きある」とも述べている。つまり死んだ兵士たちの「郷土」は当初こそ「礼厚く」彼らを讃えていたものの、時がたつにつれ彼らを「日常記憶の中より遺忘し去」っていったのである。そうした死者たちへの同情、義憤も同誌編集の動機となった。彼は編集作業開始後も、「各遺族及び町村役場へ郵便交渉再三而かも一の得る処なく殆ど絶望中止せんとまで思」（凡例）ったという。また各所より寄付を募ったが、巻末の「賛助員芳名録」によれば、二〇六名の寄付者中六四名を郡内各寺の住職が占め、公的な立場にあることを明示しているのは郡兵事主任書記二名（現職・元職）のみである。

【表】は、同じ福井県の丹生郡西安居村在郷軍人会分会が一九〇七年の設立以後、日清・日露の戦死者をいかに扱ってきたかを示すものである。¹⁰同会は当初、毎年三月一〇日の陸軍記念日に「戦病死者追弔会」を実施していたが、一九一三年「明治帝御一周年忌」と併せて追弔会を実施したのを最後に、後年の二二年までかかる行事は記録されていない。

石川県石川郡鶴来町在郷軍人会分会は、一九一一年九月「産土神金剣神社境内ニ忠魂堂ヲ建立シ、慰霊祭ヲ行」つてきたが、一九二三年に復活するまで「過去数年間中絶セラレ」ていた。「大正七八年ノ財界好景氣ハ当町ノ商工界モ頓ニ活氣ヲ呈シ、會員挙テ家業ニ尽シ、一方軍人会ノ事業ハ一時停頓」し、「当時分会ノ財産ハ甚ダ逼迫セルノ状態ナリ、

即ち二百名ニ垂々トスル会員ヨリ会費ヲ徴収スルモ、其額少額ニシテ且
 滞納多¹¹⁾かったという事情が背景にあった。明治という時代が終わり、
 大正という平和な時代を謳歌する中で、あたかも戦争・戦死者の記憶、
 追慕の念も消し去られてしまったかのようにであったことを、さしあたり

2 第一次大戦後の従軍者記念誌
 こうした「郷土」の戦死者に対する冷淡な態度が変化を迎えたのは、

確認しておきたい。¹²⁾

年	摘 要
1909	第1回戦病死者追弔会を専超寺にて執行
1910	第2回戦病死者追弔会を明源寺にて執行、会員66名出席
1911	第3回戦病死者追弔会を徳善寺にて執行、会員72名出席、「詣者満堂」
1912	戦病死者追弔会を明源寺にて執行、会員80名出席、軍人遺族その他参拝者多し
1913	明治帝御一周年忌及戦病死者追弔会を八木庄左衛門方にて執行、詣者400有余
1914	分会状況視察のため支部長巡視、講演あり、会員銃剣術の試合あり
1915	小学校にて総会開催
1916	陸海軍大臣より親閲紀念綬下付拝受式を行う
1917	〔記述なし〕
1918	〔記述なし〕
1919	〔記述なし〕
1920	〔記述なし〕
1921	〔記述なし〕
1922	4月3日、会員一同忠魂碑に参拝後、戦病死者追弔会を牧野吉右衛門方にて執行、会員遺族その他一般の参拝者約300人
1923	忠魂碑前に戦病死者の第一回招魂祭を行う、「会員遺族一般参拝者多ク盛大」
1924	戦病死者追弔会を八木林左衛門宅にて執行、「詣者多数」
1925	戦病死者追弔会を森坂治三右衛門宅にて執行、参会者村長校長村吏員会員遺族一般約300人
1926	戦死者追弔会を加畑惣平宅にて執行、分会長追弔会について口演、「詣者多数ニテ盛大」
1927	先帝奉悼会並に戦病死者追弔会を安田未定文左衛門宅にて開催、参詣者約300名「盛大」
1928	忠魂碑に参拝、午前中〔連隊区か〕司令部副官の講演、「〔青年〕訓練所視察ノ見学」、午後高原彦左衛門方にて明治天皇17周忌大正天皇3周忌村内戦病死者の奉悼及び追弔会を仏式にて執行、司令部副官の追弔講演、参詣人分会員140名青訓生48名来賓15名一般505名
1929	青年団と合同春季総会 戦病死者追弔会を池田小左衛門方にて執行、参詣人800名（うち会員140名、来賓有志20名、遺族・青年団80名）
1930	春季総会、森坂次太夫宅において戦病死者追弔会、歩兵第36連隊末松中尉済南事件についての講話、参詣数百
1931	春季総会、午後忠魂碑参拝後分会長挨拶、〔分会員〕中山茂の日露戦争役談あり、仏式戦病死者追弔会を岡本吉之丞方にて執行、真浄寺小竹師の「仏教ヨリ見タル国防ニ就キ長広舌アリ、大衆大ニ感動ス」、出席会員117名、訓練生徒47名、一般参詣者280名

出典：『帝国在郷軍人会西安居村分会史』1～135頁

第一次大戦後のことである。前出の福井県西安居村在郷軍人会分会は一九二二年の、陸軍記念日にはないが会員一同忠魂碑に参拝して「戦病死者追弔会」を復活、翌二三年には「第一回招魂祭」を実施している（もともと翌年には再び「追弔会」と名称が変わっているが）。石川県鶴来町在郷軍人会分会も前述の通り二三年に至って慰霊祭を復活、「役員総出ヲ以テ寄付金ヲ募集シ盛大ニ行フヲ得」ている。「郷土」の戦死者に対する態度に、何がしかの変化が起こったことが見て取れよう。なぜこのような変化が起こってきたのだろうか。この点を、いくつかの町村の事例から検証してみたい。

ほぼ同時期の一九二五年、宮城県志田郡三本木町の在郷軍人会分会は日露戦争戦死者四名の忠魂碑を建設し、あわせて『我が郷土』なる記念誌を発行した。なぜ同町ではこの時期に至って忠魂碑が建設されたのか。やや長くなるが、同書序文の一節を以下に掲げよう。

永く鎖国を唱へて列国と交渉を絶ちたる我が帝国は日清、日露両戦役を経て世界五大強国の一に列し、日英同盟の義により欧州大戦に参加して三度大勝、一躍英米と共に三大強国の一となり、国威旭日と共に愈々揚がれり。然りと謂も一步の進展は同情より猜疑に而して恐日と化せり。欧州大戦後戦争の惨禍に対する恐怖心より極度に平和を熱望するの余り国際連盟締結せられしと謂も欧州の天地未だ砲煙、弾雨、銃声の響の絶ゆる遑なし、太平洋上平和維持のため華盛頓会議開かれ日、英、米、仏四国協定成り軍備、防備の制限を約すと謂も主唱者たる米国は既に之を裏切りて、空軍の拡張に、毒瓦斯の研究に、軍備の拡張充実に孜々汲々たり。之加我が一昨年（の東京付近の大震災により蒙りたる弱点に投じて非人道的排日移民法案を可決し或は昨夏全国的在郷軍人の総動員を行ひて示威的行動をとる、尚ほ本年一月より布哇付近を中心として某国を仮想敵国として九ヶ月の長期に亘り海軍大演習を挙行しつゝ、あり。英国は二十年の

永き日英同盟の義を捨て今や植民地保護の美名のもとに新嘉坡に一大海軍根拠地を建造せんとす之何を意味すべきものなりや。往事の威海衛より以上の脅威たるを思はざるべからず。隣邦支那の動揺常なき、労働露国の赤化宣伝等時局益々多事に、内国民精神漸く萎靡せんとす。思ふて此処に至れば吾人の責任や重且つ大なると共に殉国諸勇士の功績の愈々甚大なりしを追慕せらる。／此の秋に際し吾人は町内外の御賛助を得、分会多年の宿望たる忠魂碑を建設し以て本町内殉忠諸勇士の勲功を賞へ、其の霊を弔ひ、一には遺されたる遺族を慰むると共に軍人会、青年団、並に児童教養、訓化、指導の中心とし以て多難なる時局に善処するの覚悟を得せしむるは吾人の責務なるを信ず。

この文章から読みとれることは、戦死者たちの記憶の象徴・忠魂碑が地域における「教養、訓化、指導の中心」としての役割を期待されていることである。このような意図のもとに過去を象徴化しようとする姿勢は、死者の忘却防止というどちらかと言えば後ろ向きな目的で刊行された前出の「記念誌」のそれとは明らかに異なるものである。日清戦争から三〇年、日露戦争から二〇年、「日独青島戦役」から一〇年という節目の年に、「郷土」の人々が「帝国の今日あるは殉忠報国の諸勇士の賜」（「序言」という認識を新たにすることが、英米ソ連の軍事的脅威や中国の動乱、「国民精神の萎靡」という「多難なる時局」に対処していく方策として志向されているのである。

三本木町分会は分会長が明治二〇年生まれの退役陸軍輜重兵中尉、幹事は後備役陸軍歩兵上等兵、評議員兼班長一五名中、海軍下士官二名以外は全員陸軍兵卒（内訳は後備役上等兵四名、後備役一等卒六名、予備役一等卒一名、国民兵役二名）という顔ぶれであった。この時期、陸軍兵卒の服役期間は現役三年（ただし歩兵は二年で帰休）、予備役四年四か月、後備役一〇年だったから、全員日露戦後、第一次大戦前後に入営

し従って日露の戦いも経験していない世代とみて差し支えないであろう。この点からも、彼らの「忠魂碑」建設、「我が郷土」なる「郷土史」編纂という事業に、単なる死んだ先輩への追慕、「慰霊」という以上の、一種の政治的意図を見て取ることは可能なのである。

ところで『我が郷土』は「蝦夷棲む地」と題する古代史から一九二五年までの「郷土史」を収録し、天正年間以降の村内城址、寺社、碑（日清戦役従軍記念碑）もその一つなど、郷土史に関わる諸史料を併せて掲載している。また在郷軍人会村分会の歴史も、一九〇二年の「志太軍人団三本木支部」設立から二三年九月関東大震災救援隊参加まで、全七二頁中一九頁を割いて詳述されている。このように忠魂碑建設に際して戦死者の事績だけでなく、三本木町、そして分会それぞれの「歴史」も同時に語られていたことは、町民、在郷軍人分員たち一人一人に自らが帰属する集団の「歴史」を共有させて一体感を涵養し、「多難な時局」に対処していくための方策に他ならなかった。

その他の在郷軍人分会主体の前近代「郷土史」編纂の事例としては、石川県能美郡苗代村分会「浅井の里の誉れ」（一九二四年、非売品）なる小冊子がある。同書は分会会長宮岸隆一が慶長五年前田利長と地元の小松城主丹羽長重との合戦経緯を綴ったもので、本人の刊行意図は明記されていないが、友人石塚与三兵衛なる人物の「序文」によれば、宮岸は「主君の爲めには一身を抛つた忠勇義烈な精神の発露に至つては却つて、過去の史実に於て、より多く顕はれてゐる」と考え、陸軍大演習が北陸で挙行されたこともあり、同書を刊行したのだという。金沢連隊区司令官村井清規は「序」を寄せて宮岸が「現時の情勢に鑑み」て「武人の典型として温故知新大に習ふべきものある」同書を刊行したことは「誠に美拳」と賞賛している。両者の記述とも、本書刊行に込められた政治的意図をよく示している。⁽¹³⁾

ほぼ同時期、同じ石川県の能美郡小松町在郷軍人会分会が一九二四年

一月、『小松町忠勇録』を刊行した。同書は西南戦争／シベリア出兵にかけての同町出身従軍者の入退営日、従軍場所、叙勲歴などの事績を、おそらく各人保有の軍隊手帳などの資料（書式が酷似している）に基づき記録している。分会長にして編纂委員長の墨田伊之助は、

軍国主義既に旧しとなして弊履の如く捨てらるゝと見れば、軍備制限並びに撤廃の声早くも津々浦々に充滿し、欧州大戦前に於ては殆ど全世界を風靡せし国家主義は忽ちにして民族主義となり、国際連盟の出現となり、果ては国家連合の提唱に至らんとしつゝ、あり。之加十年以前に於ては之を口にするだに許されざりし社会主義、共產主義の如きも、今や隣国に於ては之が実行の緒に就き我國に於ても之を論議する者頻出するに至れり。（中略）この誤れる傾向は現代社会の各方面に向ひて諸種の弊害を生ぜり。就中吾人軍職を奉ずる者に取りて最も痛切に感ずるは、軍国主義打破の觀念より来れる軍人に対する蔑視、更に延ては過去幾多の大戦に於て肉弾を献じて一死以て国難に殉じたる忠勇義烈の士に対する冒瀆の言辭なり。吾人茲に於てか遂に黙する能はず、聊か論じて之等誤れる言辭を弄する者に一矢を酬ゆる所あらんとす。

という。この発言は「社会主義、共產主義」の台頭という社会状況への危機感のみならず、自分たち軍人の存在意義を都合良く忘れ「蔑視」「冒瀆」的態度をとつてやまない社会への怨恨、反発に基づいている。従軍者、その中でも「一死以て国難に準じた」戦死者は特に、過去の栄光ひいては自分たち軍人の存在意義を証明し、同時代社会に「一矢を酬ゆる」ための象徴として持ち出されているのである。

編纂委員副長（分会副長）宮崎直正も、「吾ガ小松町分会ガ率先シテコノ国難ニ殉セラレシ忠臣烈士ノ尊キ血汐ト熱キ涙トニ彩ラレシ極メテ光輝アル歴史ヲ録シテ万世ノ龜鑑ト為シ愈々殉国ノ氣ヲ振興セシメカネテ人心ヲ悪化セシメントスル危険ナル思想ノ打破ヲ計リタルモノ蓋シ故ア

ルカナ」と分会長と同様の主張を展開している。彼らの下に分会員四六名が編集委員として名を連ねており、おそらく彼らが近在の従軍者宅を廻って資料を収集したのだろう。まさにこの『忠勇録』編集が分会総力を挙げての事業であり、それは彼らの同時代社会に対する怨恨・反発の強さをあらわすと言えなくもない。

なお『小松町忠勇録』は、尼港事件で一家全滅した同町出身の領事石田虎松夫妻・墓所の写真、死亡時の状況と履歴を「付録」として巻末に収録している。この点も、「社会主義、共産主義」の脅威を社会に向かつて説くという、同書の政治性を如実に示すだろう。

このように、第一次大戦後という時期において、各地の在郷軍人会分会レベルで前近代も含めた「郷土史」、日清・日露戦史の記録化・顕彰が実施されていったことは、同時代社会の自身への冷遇、「蔑視」に対する怨恨・反発の現れであるとともに、「社会主義」への脅威を説いて国防への社会的支持を獲得せんとする積極的意図にも基づいていた。かかる姿勢は、大正末期の在郷軍人会における、地域民衆統合への積極的姿勢をうかがわせる。また、前出の石川県鶴来町の在郷軍人会分会は一九二九年以降「戦友墓地参拝」を実施するなど戦死者の顕彰活動に努めているが、これは同じ「戦友」、すなわち歴史を載くことによる、分会としての一体感涵養を目指した施策と評価できよう。

ところでこの時期、日露戦争という「戦争の記憶」は、在郷軍人会分会以外の地域社会一般において、いかに語られていたのだろうか。この点を一九二三～二八年、福島県石城郡内における日露戦争の戦死者・陸軍中佐大越兼吉の銅像建設の事例から一瞥しておこう。¹⁴

一九二三年三月、大越の友人元福島県立磐城中学校校長植竹源太郎は同志と謀って「大越中佐顕彰会」を設立、彼の病死に伴い同郡平町長青沼鋒太郎が会長に就任、一九二八年四月一〇日（岩城郡招魂祭当日）に至って銅像除幕式を迎えた。銅像建設「趣意書」は次のように言う。

日露戦役に壮烈なる戦死を遂げて、芳名を不朽に伝へたる勇将猛卒、其の数決して数しとせず、就中最も広く世に知られたるを広瀬、橘岡中佐とし、大越中佐に至りては之を知る人蓋し多からざるべし。其の故何ぞや、報国の赤心と壮烈なる戦没とに於ては三中佐皆同じ、然れども戦没の状況に於ては互いに小異なきを得ず。「中略」是其の名の未だ世に喧伝せられざる所以なり。某等頗る是を憾む。

銅像建設のため同会は郡内一五五三人・八一団体より寄付金八五〇二円四八銭を集めた。除幕式には遺族、前陸相宇垣一成、第二師団長赤井春海、福島県知事代理、福島連隊区司令官など来賓三四〇余名を集め、「郡下在郷軍人会及青年団は夫々分会旗樹立六百余人、各種学校代表学生、係員六十余名等列席の上」盛大に行われた。宇垣、赤井、連隊区司令官や在郷軍人会石城郡連合分会長だけでなく県町村会長、郡連合青年団長、県立磐城中学校長なども祝辞を述べた。以上の事実は銅像建設が軍関係者のみならず、郡を挙げた事業であったことを示す。¹⁵同じ一九二八年、石城郡出身の水戸市会議員黒沢常葉は郷土顕彰会を設立して『石城郡郷土大観』¹⁶を刊行、「人物」章に「殉国の志士」として大越の事績を、「補遺」に植竹の記した「大越中佐小伝抄」をそれぞれ掲載している。「郷土の顕彰は驕て国土の顕彰也。祖先の遺風を顕彰し、教化の淵源する所を考究し、健全なる思想を鼓吹し、以て聖恩の万分の一に報謝せん」というのが黒沢の「素志素願」（緒言）であった。大越はまさしく「郷土」が生んだ誇るべき国家的偉人の一人であった。

同じ「郷土」出身の戦死者が社会的認知、賞賛を得ることもなく忘れ去られていることを「憾む」という、一種の郷土自慢的（ただし、あくまで国家という枠の中での）心情は在郷軍人会という集団内のみにではなく、その外部の社会一般にも存在したのであった。かかる意識に支えられ、日露戦争の死者―戦争の記憶は反軍平和思想盛んなりしはずの「大

正デモクラシー」期においても脈々と想起され続けていたのであった。

②追憶を語る兵士たち

ここまで、第一次大戦後の在郷軍人会分会が、過去の戦勝という栄光の記憶を国内外の「多難なる時局」への危機感を喚起し、軍人の存在意義を忘れた社会状況に対抗するための象徴として動員していった過程を観察してきた。従軍者記念誌刊行はその具体的手段に他ならない。また、一般社会でも日露戦争の記憶は「郷土」の英雄を求める意識に基づき喚起されていた。こうした記憶の動員は、やがて単に従軍者の経歴概略のみを列記するだけでなく、よりリアルに、従軍者自身に過去の追憶（戦死者に関するそれを含め）を語らせる、という形式をとるようになっていく。以下二つの村の事例からかかる「語り」の具体的内容、およびそれがなされたことの意味を明らかにしていきたい。

1 奈良県添上郡田原村在郷軍人会分会編 『田原村出征軍人従軍史録』

一九二七年、奈良県添上郡田原村の在郷軍人会分会が編纂した『田原村出征軍人従軍史録』は「緒言」にて、編纂の目的は「村内出征軍人の偉大なる勲功を芳記し、軍人精神を闡明し、国民精神の精粹を実録し」、「其の勲功に感化を受け、治に居て乱を忘れず以つて、平和に馴れ、驕奢に流れ、軟弱に傾くを戒め、尚武の氣風を涵養し、三千年來我が国民の誇りとする稜々たる武士道の精神を鼓舞し、発憤努力せしむるにある」と述べている。郷土部隊の歩兵第三八連隊連隊長江藤源九郎も「序文」中、同時代の社会状況を「世相一変或ハ輕佻浮華詭激ノ謬想ヲ信シ或ハ先帝ノ偉業ト之ヲ翼賛セル先輩ノ艱苦ヲ忘レテ滔々逸樂ヲ追ハントス、国本將ニ累卵ノ危機ニ瀕セリ」と批判する。栄光に満ちた過去

を、ともすれば戦争の記憶、ひいては自分たち軍人の存在理由を忘れがちな同時代社会への一種の警鐘として象徴化する発想は、前出の『小松町忠勇録』など同一である。

では同書における、従軍者の「偉大なる勲功」の語られ方とは具体的にいかなるものだったのだろうか。日露戦争開戦直後の一九〇四年五月二六日、遼東半島南山の戦いで戦死した田原村出身の歩兵軍曹岡本常治を例にみていこう。注目すべきは、彼の戦死の状況を、同じ村出身の歩兵上等兵森岡慶治郎の口から語らせていることである。

私も国に報ゆるは、今だと、降り来る弾丸物ともせず、相次で斃れる戦友の死屍を踊り越へて敵陣の中へ驀地に突込みました。脳漿は柘榴の如く飛んで、草葉を紅に染め、肝臓は馬蹄に蹂躪せられて砂に塗り、鮮血は洋々と流れ、或は傷つきて倒れる兵、倒れて呻くもの……あたり一面は血河屍山、此の世の地獄でした、恰度其時右足を打貫かれ、血で全身紅に染て尚「進メ進メ」と旭の小旗を打ち振つて部下を激励叱咤する一軍曹「オ、岡本軍曹殿……」「進メ進メ……進メ進メ……進メ進メ」の声のみ、折柄亦もや唸りを立てた一弾、軍曹の頭部を擦過した、私は進み兼ねて亦もや「岡本軍曹殿……」其の時「オ、森岡か……」「中略」「森岡進メ、進デ俺ノ仇ヲ打テ」魔王怒嚇の如き其の言葉の終らぬ頃、凄しく音たて、爆発した弾の破片は軍曹の咽喉を貫いた、鮮血は滝の如く進ると、鬼神の如き軍曹も、今は玉緒絶へて「進メ」の声も消去つたのです。而し死しても泰然自若、南山司令塔に向て其の形のくづれなかつた事は、森岡が確かに目撃して居ります。噫々南山での岡本軍曹……と語られた森岡氏の眼には、とめどなく涙が落た。（七五・七六頁）

『従軍史録』の編者は、「氣息は奄々として織の如く細るとも、敵星に翻すべき、日の丸を右手に高く振り翳された、鬼軍曹」の岡本は彼の国民的英雄・木口小平とも古諺にいう「兄たり難く弟たり難」い存在であ

ると、その「勲功」を絶賛してやまない。実際の目撃者によるリアルな語りは、それが真実であるかは別として、読者に彼らの死の凄絶さ、「勲功」をより強く印象づけさせる効果を持っただろう。おそらく、戦前のムラにはそのムラの木口小平がいた（前出の大越中佐も顕彰の際、広瀬・橘中佐と並び称された）のであり、その像はこうした生者のリアルな語りの中から造り出され、記憶化されていたのである。

それでは、生きて還り、死者の功績を語る役割を務めた森岡上等兵の「勲功」はいかに語られ、記録されているのか。『従軍史録』における彼自身の頁も、本人からの聞き書きという形式をとっている。

一八八〇年生の彼は小学校高等科を卒業後農業に従事、日露戦争に応召従軍した。〇四年五月二六日軍旗を旗手の少尉、兵三名と護衛しつつ前進していたところ、軍旗に命中弾を受けた。「退却に遅れた敵兵が死武者に射撃した」のだった。森岡たちは、「ワァー」と射撃する敵に突入して三名の露兵をめちやく／＼に突殺しました、そして一将校を捕虜として仕舞ひました。彼は「始めて露兵を殺したのだから紀念に露兵の所持品をと、私は時計と写真と、十字架の三品を殺した奴のを収めて置き」、「四名の内一名は何も紀念品がないからと、服のボタンと露兵の血に染つた肩章を収めて居りました」ところが戦後の功績調査で、

皆それ／＼御調を受けた時肩章が何より殺した証拠となつて肩章を収めて居た兵は、殊勲者として功六級と云ふ兵卒では破格の恩典に浴し、即日伍長に任官、且つ軍人の龜鑑だとして内地へ帰還しました。当時新聞紙上に三十八連隊の軍神〇〇氏京都に安着と言ふ記事が載つたのです。（九八・九九頁）

一方の森岡が行賞として得たのは「天皇陛下より斥候勤務に奮励した慰労として金二円二十銭」、「従軍中二十一ヶ月間無病無傷者として連隊長殿より褒賞金三円」、「勲八等白色桐葉章並に功七級金鶏勲章及年金百円」および上等兵への進級に過ぎなかった。彼は「何もかも大君の御

為、御国の為と奮闘したのですから、そんな事とは思ひましても、仕舞つた俺が真先に露助を突き貫かう（たのに？）と思ふ事もあります」と、待遇の格差に内心忤怩たる思いを抱きつつも、連隊の象徴・軍旗を護り得て上官に「森岡よく働ってくれた、軍旗の安全を得たのは貴様の働が大いに有る」と誉められ、「あの有史以来の日露の大戦争に勝つた」ことを慰め・誇りとして戦後を「農業に精励」しつつ生きてきた。

彼は従軍中斥候に出て危うく味方から逃亡兵と疑われたり、一緒に斥候に出た仲間が穴の中に仕掛けられた棒杭の串刺しになるといふ悲惨な体験もしている。だが彼の意識、語りの中心にあったのは、天皇への忠誠もさることながら、自己の社会的地位・名誉欲が満たされた（あるいは満たされなかった）ことであつた。老兵たちは戦争体験を平たく言えば確かに悲惨だが、儲かるものとして堂々と、「言ふ能はざる歓喜の情」をもつて語つたのである。

このように本音と建て前の入り交じつたような戦争体験の語り方は、「赫々たる勲功を建て軍人破格の恩典金鶏勲章を賜るの氏は、実に我郷土の誇りであらねばならぬ」、「身分は軽き上等兵なるが故に一層、欽慕と、恭敬と、同情の念を深くするのであります」と、従軍者記念誌という公的な場における承認、賞賛を受けていたのである。

2 在郷軍人会西安居村分会編 『帝国在郷軍人会西安居村分会史』

前出の在郷軍人会西安居村（福井県丹生郡）分会編纂『帝国在郷軍人会西安居村分会史』（一九三一年八月）は、本来分会設立二五周年記念として作られた書物である。だが「歳月の移ると共に其（従軍者）の偉績の滅せんとしつ、有るは之実に国の為惜しむ所にして又我郷土の最大恥辱」であり、「郷土子弟を教養する生ける資料」にもなると頁数の過半をさいて「勇將士録」を掲載しており、従軍者記念誌としての性格も

併せ持つ。同書もまた、従軍者から直接聞いた体験談を多数収録している。同書編集にあたっては、

各班の在籍者に対し各自に軍隊手帳を提出せしめ、或は村外、県外の移住者に対しては略歴の提出を交渉せるも容易に送付し来たらず、〔略〕尚現住者にして略歴を提出し来たれるも詳細なる戦績を知ることを能はざるにより先づ日清、日露の戦史に就き調査するの要あり、博文館発行日清戦争実記三十冊四千頁、日露戦争実記五十冊七千五百頁、参謀本部編纂日清戦史七冊七千五百頁、日露戦史二五冊約三万七千頁其の他の参考書二千頁合計約六万一千頁を読破せねばならぬが、〔福井県立図書館に行つていたのでは日数・予算不足のため〕某所より特に以上の書を借覧の榮を得、而して之を各自の軍隊手帳と対照し未だ詳細ならざるものには本人を招致しその記憶を追憶せしめ、又招致に応ぜざるものに対しては特に本人の所在地に出張して其の戦況を聞き、或は照会事項を詳記し、郵便回答を得る等、所謂一切の手段を尽し、〔略〕一年を費して漸く原稿の脱稿を得たり

と史実の正確な把握に多大の意を用いた旨自讃する。完成した同書は「分会史」と称すると云へども一面は支部史たり、連合分会史たり、又勇将士録は単に当分会勇士録たるが如きも実は日清小史、日露小史とも称すべく、故に将来各分会が其の史を編纂せんとせば其の底本たることを信ずる」との自負が示される。彼らがここまで個々の従軍者「事績」という小さな歴史と、戦争という大きな歴史の正確な結びつけにこだわったのは、軍人が日清戦争以降いかに重大な国家的貢献をなしてきたかを論証して社会の側に周知徹底させ、在郷軍人会という自己の存在意義を強調したい、という欲求の強さの現れに他ならない。

さて内容に目を転ずると、同書の編集長・後備役陸軍一等看護長（本願寺従軍布教使、初代・第三代分会長）藤原龍存自ら、日清・日露戦争

に従軍した際の体験を語っている。彼は日清戦時、台湾の嘉義城攻略に参加、「敵の傷者の路傍に呻吟く者、血を吐きつ、傷きたる体を起して怨ましく戦勝者を凝視するを見ては又心地良きものに非ず」⁽¹⁸⁾、「各隊よりの病者殺到入院の前後を争ひ発着部が病傷日誌を記しつ、ある裡に死亡する者数人有るが如き混雑中に病室を開設せるも専属の職員は唯一看護手一看病人ある而已、極力看護に従事すると雖も赤痢、チブス、虎列刺等の重症患者数十名を収容せる事とて到底満足なる看護を為す能はず」^(三三七頁)などと惨烈な体験を回想する。

また日露戦争に応召した歩兵上等兵河上初太郎（一九〇一年入営）の中隊は〇五年三月一日、彰駅店の戦いで「忽ち敵に四方より射撃を及びせかけられ見る／＼内に死山血河の修羅場と化」した。彼の中隊長吉村中尉は「今中隊が此処を退却すれば我連隊は勿論我が旅団の運動上非常なる困難を来すが故に我中隊は一步も退却せず此の地を死守するなり、中隊の死に場所は此処なるぞ、皆決心をなし潔きよく名誉の戦死をなして国恩に報ぜよ」と命じ、戦死してしまった。この時「五十名余りは名誉の戦死をとげ」たが河上は負傷して人事不省となり、生還した^(二五〇―二五二頁)。

彼ははるか後年の「昭和五年三月福井だるま屋楼上に於て陸軍展覧会の催され」たので出かけてみると、「血染めの軍服と題し吉村大尉殿の軍服が展示されて」いた。「之れ即ち其当時着用して居られし我中隊長吉村操大尉の軍服であ」った。「河上は彰駅店戦争当時吉村中隊長殿の部下として奮戦せし一員なるが故に血染の軍服の前に立ちし時其当時の惨憺たる現場が目前に展開し感慨無量悲憤の涙を禁じ得ず思はず懐古の情に袖をしぼりたり嗚呼勇敢なりし中隊長殿は二十五年以前に満州の原頭に於て慕はしき中隊長殿……血涙滂沱（吉村中尉之墓は福井西別院墓地に在り）」^(二五三頁)との後日談を語る。

これらの語りで注目すべきは、藤原編集長が戦争によって「我が邦東

洋の盟主となり、強を世界に比す、威武烈々、嗚呼威なるかな大日本」と「自序」中述べ、自分たち従軍者の惨烈な体験を国家の栄光の礎として位置づけていることである。そして四半世紀後、大陸の緊張増大に際して「満州の權益確保」という主張を社会一般に伝達するため開かれたに違いない「陸軍展覧会」で老いた河上上等兵が流した「感慨無量悲憤の涙」、死者への追想は結果的に、栄光の過去と現在を繋ぎ、「權益確保」というメッセージに読者の情緒的な共感を呼び起こす役回りを果たす。この意味で、満州事変勃発直前という時期に公刊された従軍者たちの回想はきわめて政治的な記述と言いうる。

さて政治的主張という同書の特質を考えると、日清・日露以外にシベリア出兵従軍者の体験談を多数掲載していることも重要である。というのは、彼ら従軍者の多くが、

我軍の残飯に集まる憔悴せる婦人、子供等は涙の中に其今昔を語る、貴族は其の所有せる貴金属は既に売尽し、今は其の糊口に窮せる彼貴婦人等も遂に人肉市場に出没するの惨状を現す、赤軍の目は此の貴族、軍人に注がれ聊かの異彩を発見しては惨殺、絞殺常に魔の手は延びつ、ありぬ、彼等を思へば感慨無量なり〔略〕今露国の現状を目撃しては忠君愛国の至誠一層に湧に寒心警戒起するを覚へたり、我が国民たるもの彼の社会主義者に対しては寔し以て我国を泰山の安に置かんことを期せざるべからずと感奮した（歩兵特務曹長中山茂、二二八・二二九頁）

あるいは、「若し我国が斯くの如き〔露国のような〕有様になつたらばと慄然となつた、諸君無政府主義、平等主義共產主義の末路の憐れさは言葉にも筆にも書き現す事は出来ない」、「吾日本人の内にも右の様な主義者が有る様な事を聞くが彼等主義者には百聞は一見にしからず露国の現状を見学させてやりたい物だ」（一九二〇年入営の歩兵一等卒田中堅、二三八頁）と、戦場のリアルな見聞として亡国の悲哀、「無政府

主義、平等主義共產主義」の危険性、その反面としての「大日本帝国の有難さ」を語っているのである。

その露国社会主義者の脅威を語った中村特務曹長は一八九六年生、一九一六年徴兵で歩兵第三六連隊に入営、准士官にまで昇った人物である。彼は済南出兵にも従軍、そのときの体験について、「支那の各都市には各国の租界あり日本の租界を又至る所に支那人其の他の外国人を安全地帯として戦争起るや支那町相当なる者、婦人等は此の外国租界に避難し鎮静すれば帰家する」ので「支那人中には却て外国が有する治外法権及び租界のあるを喜ぶ者多し」、「支那国内には各国の権利を有する箇所多く、我帝国は満州を始め至る所に其の権利を有する為と支那の物価至つて安く、且つ大陸的な為生活し安く、土地は肥沃にして空地多く移住するに近くして適当なる地と信ぜり」（二三二・二三三頁）と、満州は豊かで「大日本帝国」の国威に護られているから移民しやすい、むしろ中国人も喜ぶと述べている。彼は前出の【表】にもあるように、一九三一年の陸軍記念日、分会員たちの前で「日露戦談」を語っている。内容は定かでないが、日露戦争を実体験していない彼の語りとは、上記の体験談と同様に、満州進出の正当性を自己の経験、歴史的な文脈に即して訴えかける内容ではなかったか。

この直後の満州事変勃発以後、全国で「十万の精鋭を犠牲とし、数十億の巨資を投じ、苦辛経営幾十年にして築きたる帝国の生命線を放棄せんは、明治天皇の遺訓に対し、先輩流血の偉業に鑑み、吾等在郷軍人の断じて忍ぶ所に非ず」というような歴史的な文脈に基づく主張を展開し、支持を獲得していくことになる。だがここで考えてみたいのは、陸軍省が満州事変後発行したある宣伝パンフレット中の記述についてである。そこで事変勃発までの日本は「有形無形上、我が国ときつてもきれぬ満州を忘れ、崇高にして絶対なる皇国の使命を忘れ、甚しきに至つては、所謂有識の士にして、満蒙放棄論をすら口にするものがあるに至る」よ

うな「国民的退讓時代」として描かれている。ところが事変勃発するや一転、「同胞は満州問題の重要性に徹し、挙国一致、世界を挙げての異端邪説を排して、唯一意国家的理想に邁進²⁰⁾」するに至った。「昭和六年九月迄、我が帝国は正に転落の一途を辿²¹⁾」っていたというのに、なぜそのような突然の変化は起り得たのか。なぜ「滿蒙放棄論」は支持を集めなかったのか。この問題について、われわれは確たる答えを持っているだろうか。

同パンフは、「過去四半世紀に亘る暗黒大陸たる満州の姿は、日露戦役殉難烈士の祭事に対する大なる懈怠であつた。戦後二十八年の今日、はじめて我等は、真の慰霊の実を挙げ得た²²⁾」などと、国民の情念に訴えかける主張を展開した。そのようなかたちの主張がある説得力を持ち得た背景を考える際、本稿が観察してきた、事変勃発以前から在郷軍人会町村分会という「草の根」レベルで戦争の記憶が同じ「郷土」の英雄という具体像をもつて（その像は生還者のリアルな語りから造られていく）日々語り継がれていた事実注目すべきではないか。前出の西安居村はこのような戦争の記憶を「語る」場に二〇年代以降、毎年数百名の村民を参集させていたのである。こうした末端レベルにおける戦争の記憶喚起という活動は、直後の満州事変という「戦争」を正当化し合意を獲得していく社会的回路のひとつとしての意味があったのではないか。²³⁾

また、従軍者記念誌上で「戦争」は実体験者の口から「確かに悲惨だが儲かるもの」、あるいはシベリア出兵など直近の戦争の例から「決して負けるものではない」、「大日本帝国は有り難い」といった文脈でも語られていた。²⁴⁾これらの点も、当時の社会における戦争観の特質およびその形成過程の問題として捉えていくことが可能なものではなからうか。

③ 満州事変／日中戦争期の従軍者記念誌

満州事変に際しては、府県単位で出征兵士の後援組織を結成する事例が全国的に観察され、かかる組織が従軍者記念誌も刊行する事例がある。例えば滋賀県庁学務部内に設立された「滋賀県出動軍人遺家族後援臨時委員会」が事変勃発からはば一年後の三二年一〇月公刊した『満州上海事変忠誠録』がある。同書は三編よりなり、第一編は「護国の華」と題する県内戦死者四四名全員の写真・事績集である。記事は各本籍地市町村長、郷里の小学校長、各所属部隊長より蒐集掲載されたもので、全出征者の階級姓名も市町村別に掲載されている。続いて第二編は「奉公の誠」と題する出征者美談集、第三編は「銃後の赤誠」と題する銃後後援活動の美談集である。

本書編纂の目的は第一六師団長山本鶴一が「人をして感奮興起せしむるの事例に關しては之を永く後昆に伝へて範とすべきなり。況や皇國の寸前方々尚暗澹たるの秋之が匡救に幾多新進の國士を要する焦眉の急なるに於てをや」と述べているように、従軍者（生還者・戦死者）を「後進者」の教材とする意図に基づいていた。各戦死者の名前の次には住所が明記され、「事績」として青年訓練所指導員勤務など入営前の「郷土」の貢献度の高さや真面目な修学・就労態度が記録・賞賛されている。このように同書が戦死者を各市町村―「郷土」の偉人として描いているのも、これから兵士となる者に「後進者」としての立場意識をより強く抱かせるためと思われる。ちなみに美談の特徴として、後に戦死する息子を送り出した父親の態度が「実に「昭和の一太郎ヤイ」に比すべき美はしき談」（六八頁）と評されたり、別の兵士を送る母の美談が「昭和の一太郎やあい」（二四五頁）と題されているなど、まさしく日露戦争という歴史的記憶に即して国家への献身が称揚されていることが挙

げられる。この点、事変勃発以前の従軍記念誌と同一の性格を持つ。

一方市町村レベルでも、事変従軍者の「勲功」記録化は行われている。例えば日中戦争勃発直前の一九三七年四月二五日、前出の奈良県添上郡田原村在郷軍人会分会は二七年刊行の『田原村出征軍人従軍史録』を増補改訂、再刊行している。同書「緒言」は改訂の理由を満州・上海両事変、満州警備に「従軍せらるゝ本村出身軍人相当多」いので、「勲功史録の増補改訂を計画」したと説明しているのみである。だが歩兵第三八連隊長田路朝一は「序」にて「大正ノ御宇ノ中葉以降世相全ク一変シ或ハ輕佻浮華詭激ノ謬論ヲ信シ或ハ天皇ノ偉業ト之ヲ翼賛セル先輩ノ艱苦」は忘れられていた、「偶々満州事変ノ勃発スルヤ国民精神作興ノ緒ニ就キタリト雖モ内ニ国体ノ明徴未タ全カラス外ニ列国ノ重圧益々其ノ重キヲ加ヘ皇国ノ前途益々多事ナラントス」る、従つて「人ヲシテ肅然襟ヲ正サシム」る本書の刊行は有意義であると述べている。従軍者の「勲功」、死の有り様を教化の材料にして戦争の持つ意義を再確認し、再び大正期のような「天皇ノ偉業ト之ヲ翼賛セル先輩ノ艱苦」が忘却されるような事態を防ぎたい、という改訂の意図をよく示しているよう。

その「戦争の意義」の具体的な語られ方を示す、満洲事変従軍者の体験談聞き書きを一例だけ掲げよう。ある歩兵伍長（三〇三―三一頁）は「エイッ」逃げんとする奴をすかさず腰間の秋水は銃口の先に光り、…「ウーム…」バツタリ…瞬間フラ／＼となつてホット我に帰つた自分であつた時、人を○^(原文ママ)した後から襲ひ来る不気味な戦慄…」と討匪行での生々しい殺人体験を語る。しかし彼は「正義の利剣に殲れる者の過去の暴虐を思ひ其の末路こそげに憐れ」、現地民にも「密偵に志願する者非常に多く、日と共に我が軍の治安工作は進歩し、吾々は勇気百倍、王道楽土建設を目指して一路邁進した」と、戦争の意義、正当性を自己の言葉として郷土の人々に語りかけることも忘れてはいないのである。その郷土の側も、「国家を安泰の安きに置かれた其の勲功は筆舌に

絶する」と兵士たちの動きを称揚して止まなかった。

この直後に勃発した日中戦争以降においても、こうした地域単位の従軍者記念誌は複数刊行されている。埼玉県国防義会は一九三九年『殊勲録』を刊行、県内の日清、日露、第一次大戦、シベリア出兵、金鶏勲章、満州事変における金鶏勲章拝受者八六四名の住所氏名官等を郡市別に全て掲載している。本来は同会主催の金鶏勲章創設五〇周年記念式典にて参列者に配布されたものだが、「皇国の威烈を六合に照徹せしめ尚武の国体を明彩ならしめ」る「序」という勲章の主旨が特に記されていることや、三九年という時期を考えれば、郷土の「先輩」にならつて後に続く者の奮起を期待するという意味合いも込められていただろう。

市町村レベルでは在郷軍人会八幡市連合分会（福岡県）『尽忠遺勲録第四輯』（非売品、一九四三年）がある。同書は一九四〇、四一年の中国戦線における戦死者八五名の事績を顔写真付きで収録⁽²⁶⁾、「遺族並ニ郷土教化団体ニ贈呈シ其家門ノ榮誉ヲ後世ニ伝ヘ市民精神修養ノ資料」（「緒言」）とするため作られたもので、同書刊行の経費を全て負担した実業家の末松誠一は「挨拶」にて、

今時大東亜戦争ハ遂ニ大東亜戦ト進展シ皇軍ノ嚮フ所之ヲ阻ム者何者モナイノデアリマス。這ハ一二御稜威ノ下忠勇義烈ナル将兵ノ御奮闘ノ賜ト只管感謝ニ堪ヘナイ所デアリマス。就中是等聖戦ニ従ヒ数々ノ勲功ヲ樹テラレ遂ニ護国ノ神ト化セラレタル将兵ノ御英霊ニ対シマシテハ满腔ノ感謝ヲ捧ゲテ已マナイ次第デアリマス。英霊ノ勲功ヲ偲ヒ故人忠誠ヲ後昆ニ継承スルハ我等ニ課セラレタル責務デアリマス。

と述べている。まさしく日中戦争という「聖戦」に斃れた兵士たちに感謝を捧げ、顕彰するという意志に基づいている。内容をみても、ある陸軍軍曹について「従容として死に就かれ〔中略〕君の死を見守る戦友唯一人として感涙に咽ばざる者なかりしは其の生前を思はし」（一七五

頁)めたとの「副官代理」の報告を掲載するなど、死者の勇戦を賞賛して止まないものである。これに対して八幡市長内田隆は「今時支那事変に於て發揮せられた之等殉国の士こそは実に皇国の柱石、大東亜建設の尊き礎であり、其の烈々たる忠君愛国の大精神と千歳不滅の勲功は吾等の日夜追慕崇敬に堪へない処である」(「緒言」と賞賛を惜しまない。

だが、同書のいう「皇国の柱石、大東亜建設の尊き礎」という程度の抽象的な説明で、当時の社会は兵士の死、戦争の意義を真に納得、受容していたのだろうか。必ずしもそうとは言いえないことを示すのが、宮城県遠田郡南郷村教育会編『南郷村出身各戦役従軍将士陣没勇士伝記』(一九四〇年)である。同書は戊辰戦争以降の村出身戦没者(日中戦争のそれは発行時点で二〇名)一人一人の事績を村内四小学校の教員が分担して資料収集・執筆したものである。

同書はその「緒言」によれば村内各戸に配布されることで、刊行の趣旨は戦争継続中の現在でこそ「戦死陣没せられた勇士に対する村民の敬虔的慰霊弔魂、また御遺族に対する奉仕等、其の赤誠は、見る人をして将に感激に堪へざらしむるものがある」が、「斯うした村を挙げての赤誠は、日露、日清、更に遡つて戊辰の役にも同様であつたらうに、三十年とたち、四十年と過ぎ、五十年と去るに従つて、殆ど村民の念頭より離れ去らんとする傾向にあつたことは寔に遺憾」であるから、戦死者の事績を記録して末永く顕彰し、教育上の「精神資源」にも用いたいというものであつた。死者の顕彰が目的だから、当然彼らが「何のため」死んだのかの説明されねばならない。

同書は各戦役の部ごとに、冒頭でその時代背景と意義を説明している。例えば「満州事変」の項には「満州建国」という具体的「成果」が明記されているし、尼港事件ですら「北樺太の利権獲得」が挙げられている。そして「支那事変」の項では「排日毎日抗日は支那国是の如き観があつたのに、昭和六年の満州事変以来一層強烈に此の思想を国民に吹

き込み」、「日本仇敵の敵愾心を煽り「倭寇殲滅失地回復」の国民標語のもとに日本と戦端を交ふるの機会を狙つて居た」ことが戦争の原因と述べている。その「排日毎日抗日」の具体例として、同書が「昭和六年に著述刊行されたもので、此の本を所持せぬ者は中華民国の人間としての資格が無いとまで言はれたものだ」という『日本征討論』なる書籍を用いているのは興味深い。この書は①「日本の国民思想は將に分裂の状態にある」(現状保持と現状打破の相克、軍隊は国民に信用なし)、②「日本は経済的に行き詰つている」(日本は国際間の同情がないから外債の見込みはないし、貿易も貧弱)、③「長期戦になれば第三国の援助がある」(支那は焦土戦術で広大地域に日本軍を分散させることができるから長期戦に有利)、④「日本軍は実戦の経験に乏しい」(経験があるのは満州事変・上海事変参加部隊のみ)との「四大綱領」を掲げ、

果せる哉、其後日本の議會を見ると議會は事毎に軍備に反対し軍部横暴を叫び、軍部亦政党内に好感を持たない。斯くして居る中に昭和十一年二・二六事件が突発する、愈々以て日本征討論予言の通り一つ一つよく刳合立証されて来る、日本人の誇つて居た大和魂といふ日本思想の分裂は、斯くまで極端に露骨に表面に暴露されて来ている。時は今だ、開戦の機が熟したのだ、起て中華民国、戦は將に今である

として、「蘆溝橋に於ける無謀発砲事件」に端を発した事変は未解決のまま今日に至っていると述べる。重要なのは、このようなくとも戦争の積極的意義付け、賛美などといえるものではない文章が特に否定もされず(肯定もされないが)『陣没勇士伝記』という性格の書物に書かれていることである。文中より浮かび上がるのは、この時期政府が呼号した「東亜新秩序」建設などといったポジティブな、しかし不明瞭な題目などではなく、戦争の先行きに対する不安感ばかりといつても過言ではない。

もちろんこの『陣没勇士伝記』も、村内初の戦死者について「彼我銃砲声の交錯せる戦場の真只中に身を以て部下を励まし幾多の敵を撃滅せる自己分隊の銃側にて最も壮烈なる戦死を遂げ」、「護国の神として」靖国神社に合祀叙勲されたなど、戦場での個人的な勇敢さ、名誉を称揚して止むところはない。それは前出八幡市『陣中遺勲録』と同じである。だが、それでは彼らの死に一体どのような意義があるのかとなると、実のところ掴みかねていたように思われてならない。もし何らかの確信があるのなら、同書の性格上、それを書くはずだからである。

おわりに

各市町村における従軍者記念誌は、日露戦争終結直後、戦死者が社会から忘却されていくことを嘆いて作られた。だが主に在郷軍人会市町村分会によって作られた第一次大戦後以降の記念誌は、そのような後ろ向き意図ではなく、ある積極的な政治的意図、すなわち過去の栄光の記録・記憶化を通じて軍人という自己の存在意義を再確認、反軍平和思想盛んなりし社会に訴えていくために作られていったのである。

そのような記念誌の中で日清・日露の追憶を語った老兵たちは、戦死者の壮絶な死を語って戦争の「記憶」に具体性を与えて共感を呼び起こす役回りを演じた。そうした語りのあり方は「郷土の英雄」を求める人々の心情にもかなうものだった。彼らが自己の従軍体験を語る際には、確かに悲惨な体験も語られるものの、基本的には名誉心充足の機会として戦争を描いていた。そのような従軍者たちの「語り」を彼らの「郷土」が編む際には、彼らが国家の大きな歴史に占めた位置、役割の明確化が熱心に行われた。それは戦死者の死の「意味」を明らかにすると同時に、戦争の持つ国家・個人それぞれにとっての価値を地域ぐるみで再確認、受容することでもあった。

以上の過程を通じて、満州事変勃発以前から満州は「血をもって買った」土地であり、したがってその権益は擁護されるべきという論理や「社会主義共産主義」の脅威が市町村という社会の末端レベルで繰り返し強調されていった。満州事変に際して軍、在郷軍人会などが国民の支持を調達する際、日露戦争の「記憶」を強調したことは周知のことだが、本稿が掲げた諸事例は、そのような「記憶」が当時の社会において具体的にいつから、どのようにして共有化されていったのかを示唆するものである。

その満州事変という新しい「戦争」勃発後も市町村の従軍者記念誌は刊行され、生者・死者を通じて従軍者の功績と国家への貢献が語られ、称揚されていった。そのときも彼らが「郷土」の偉人という文脈のもと、日露の記憶になぞらえて（例えば「昭和の二郎」という言い方がなされる）記録・記憶化され、彼らの遺族や後進の兵士たちも同じように「国家のために死ぬこと」を正当化していった。この点を当概期の「紙の忠魂碑」が果たした機能として挙げることでしよう。

しかし日中戦争の中で作られた従軍者記念誌は、兵士たちの「郷土」が、戦争それ自体の正当性には疑問を抱いていた、あるいは積極的な意義を見いだせずにいたことを浮き彫りにする。だが同郷の兵士が意味のない死を遂げたということは堪えられないことであり、それゆえ「郷土」は一致して従軍者、戦死者の個人としての勇戦を称揚し、それは後に続く兵士たちも同じように死ぬことを正当化―強要してやまなかった。⁽²⁸⁾

宮城県『南郷村出身各戦役従軍将士陣没勇士伝記』は、事変終了まで従軍者の事績は「全部省略」と記したが、それが実際に書かれることは、敗戦のためになかった。それでは戦後の地域、死んだ兵士たちの「郷土」は彼らの死についていかなる意義づけをしていったのか、この点は稿を改めて論じたい。

註

- (1) 在郷軍人会（奈良県添上郡）田原村分会『田原村出征軍人従軍史録』（一九二七年）。同書については後で詳述する。
- (2) 阿部安成ほか編『記憶のかたち コメモレイションの文化史』（柏書房、一九九九年）など。
- (3) 羽賀祥二『史蹟論』（名古屋大学出版会、一九九八年）。また、古川武志『地域社会における郷土史の展開―泉州地域を中心として―』（『ヒストリア』一七三、二〇〇一年）は、戦前における「郷土史（誌）」編纂に地域の（統合）、アイデンティティの確立という意図を見いだすが、同時代『戦争史』への言及はない。
- (4) 檜山幸夫編『近代日本の形成と日清戦争』（雄山閣）、荒川章二『地域と軍隊』（青木書店）、原田敬一『国民軍の神話』（吉川弘文館）、首都圏形成史研究会『帝都と軍隊』（日本経済評論社）など（すべて二〇〇一年刊行）。
- (5) 矢野敬一「戦死者の語りとネーションの物語―十五年戦争下の『新潟新聞』から―」（『大阪大学日本学報』二一、二〇〇二年三月）は満州事変以降、新潟県内の新聞に対象を限定し、戦死者がどのように語られてきたかを分析する。新潟という一つの県を分析対象とした理由については「郷土部隊」という表現にみられるように各「県」が人々のアイデンティティ意識の核をなしてきたという。だが、それだけでは忠魂碑のように、市町村というより微細な単位で戦死者顕彰が為されたことの意味は見えてこない。
- (6) 『季刊現代史第九号 日本軍国主義の組織的基盤 在郷軍人会と青年団』（現代史の会、一九七八年）は今なお在郷軍人會に関する最も緻密かつ体系的な実証研究であるが、戦死者の追悼・顕彰活動には考察が及んでいない。そもそも同会分会の実態自体、前出『季刊現代史第九号 日本軍国主義の組織的基盤 在郷軍人会と青年団』以外にも、大西比呂志「成立期帝国在郷軍人会と陸軍―地域における機能の考察―」（『早稲田政治公法研究』一一、一九八二年）、宮本和明「帝国在郷軍人会成立の社会的基盤」（『茨城近代史研究』一一、一九九六年）、北泊謙太郎「日露戦争後における帝国在郷軍人会の成立と展開―大阪縣隊区司令部管内を中心に―」（『ヒストリア』一六三、一九九九年）などの先行研究があるが、いずれも題名が示すように日露戦争後の成立初期を考察対象としており、本稿が重視する第一次大戦後に関しては今なお手薄な状況にある。
- (7) 加藤陽子『戦争の日本近現代史』（講談社新書、二〇〇二年）。
- (8) 管見の範囲内であれば、県レベルでは『明治三十七八年徳島県戦時史』（徳島県内務部、一九〇七年）や『明治三十七八年福岡県戦時事績』（福岡県、一九〇八年）、『石川県明治三十七八年戦時紀』（石川県庁、一九〇八年）、郡レベルでは『奉公録』（京都府久世郡役所、一九〇八年）、『日露戦役伊那軍人従軍史』（長野県下伊那郡出身者を対照、同編纂所、一九〇七年）『明治三十七八年下伊那郡時局誌』（下伊那郡役所、一九〇九年）など多数。
- (9) 身分は不明だが、口絵として戦没者遺影とともに掲げられた彼の写真からみて、仏教者と思われる。
- (10) 『帝国在郷軍人会西安居村分会史』（一九三二年九月）年表より作成。
- (11) 以上は『鶴来町分会沿革誌』（同分会、一九二九年一月）一―三頁。
- (12) ただし西安居村では一九一五年、大正天皇即位大典記念として忠魂碑を建設しているが、一九二二年に至るまで、陸軍記念日どころか年間を通じ慰霊行事に関する記述は出てこない。
- (13) 在郷軍人会分会の事例ではないが、京都連隊区将校団は管内における中世以降の合戦史を昭和天皇即位の大札に併せて『郷土戦史』（筆者が実見したのは、第一巻と慶長五年大津山の戦いまでを扱った第二巻のみ）と題し刊行している。同書は「徒に新を競ひ奇を好み根本を忘れて遠きに趨り古を軽んずるのみならず遂には国本を忘却し、光輝ある伝統の精神をも消磨して憚らざるものあるに至りては慨嘆の至りに堪へず（中略）祖国の歴史を明にし実蹟に徴して而して真理を極め確乎不拔の精神を養成把持し、以て時世の進運に推移するを要す」と述べている。同書もまた政治的意図に基づく「郷土史」の一つである。
- (14) 以下、『大越中佐銅像建設記念』（大越中佐顕彰会、一九二九年）による。大越は一九〇五年三月七日李官堡の戦いにて苦戦に陥り、増援を要請に行く途中で負傷、進退窮まって自決した。
- (15) 大越中佐顕彰会の顧問一五名中、身分が判明する者として大野村長木田織江、植田町町会議員佐川亀太郎、神谷村村会議員榎原多章の名がある。
- (16) のちの一九八二年、聚海書林より復刻。
- (17) 分会長・予備役陸軍伍長岡本強「分会史編纂に就て」。
- (18) しかも「捕虜の多くは城外に処分された」と述べている。
- (19) 一九三一年九月、在郷軍人会東京府市連合会の「決議」、「資料日本現代史八 満州事変と国民動員」（大月書店、一九八三年）五三頁所収。満州事変に対する社会的支援の実態については、江口圭一「満州事変と民衆動員―名古屋市中心として―」（『古屋哲夫編『日中戦争史研究』吉川弘文館、一九八四年）や小菅信子「満州事変期の軍国熱と排外熱―甲府市を事例として―」（『甲府市史研究』八、一九九〇年）など。
- (20) 陸軍省『日露戦後二十八年 満蒙は平和の建設へ』（一九三三年三月一〇日）九・一〇頁。なお、いわゆる満蒙放棄論としては、一九二二年頃の東洋経済新報紙上における一連の論調がある。これに関しては、松尾尊兌『大正デモクラ

シー」(岩波書店同時代ライブラリー、一九九四年、初刊一九七四年) 三〇九～三一六頁を参照。

(21) 前出『日露戦後二十八年 満蒙は平和の建設へ』一九頁。

(22) 『帝国在郷軍人会三十年史』(同会、一九四四年) 一八二・一八三頁は、機関紙『戦友』を引用し、満州事変前勃発以前の一九二九年五月六月にかけて在郷軍人会本部が安藤副会長以下、各支部代表者中の希望者七五名からなる「弔魂団」を編成、満州の主要戦場にて弔魂祭を行った旨記述している。同書はその理由として「死山血河を築いて購ひ得たる満蒙の權益が、真に国家の生命を賭したるの真意義を忘れ、只、漠然として我勢力の進展地たるをのみ知感する者あり。故に或は満蒙抛棄論となり、満蒙退嬰論となり、明治天皇の偉業を中道にして阻却せんとするの徒を出だ」している風潮への対抗を挙げている。かかる会中央の動向と、本稿で観察してきた各分会との連動性の問題は今後の課題としたい。

(23) 山室建徳「日露戦争の記憶―社会が行う〈現代史教育〉」(『帝京大学文学部紀要教育学』二六、二〇〇一年)は、明治昭和期の陸軍記念日のイベントに関する新聞報道などから、日露戦争という「記憶」に社会統合上の機能を見いだした先駆的研究であるが、本稿に掲げた諸事例はそのような「記憶」形成の具体的回路のひとつと位置づけられる。

(24) 前掲の田原村『従軍史録』でも、例えば工兵一等卒東田角造は日露戦争の体験を「自分の国を戦場とされた支那が、広大な耕地を蹂躪されながら一言の不服も唱へず、尚私達の使役となりて用材の運搬等に従事した」のを見て「弱国の国民に対して深く同情し、吾が国民の幸福を痛切に感じました」との「追憶談」を語る(四四頁)。戦前社会における「戦争イメージ」のあり方を考える際、このように「弱国」の悲惨さが繰り返され実体験として身近な者によって強調されていたことは、時期による濃淡はあるにせよ、なぜ戦前社会では軍備拡充・戦争への支持が一定程度継続して存在したのか、という問題を考える際興味深い。

(25) 例えば功刀俊洋「満州事変期の地域「国防」 団体―栃木県国防同盟会の事例―」(鹿兒島大学教養部『社会科学雑誌』八、一九八五年九月)は、栃木県が設立した後援団体国防同盟会(各市町村に支部も設立)について分析している。

(26) これより前の刊行分は未見。

(27) 一九三七年一〇月村で初めて戦死した陸軍歩兵軍曹の事績、『陣没勇士伝記』一四八～一五一頁。

(28) 日中戦争期以降の「郷土」における、慰問や葬儀を通じた兵士たちの「労苦」および死の顕彰の実態に関しては、さしあたり拙稿「兵士たちの死と「郷土」」(『国立歴史民俗博物館研究報告』九一、二〇〇一年三月)を参照。

(国立歴史民俗博物館歴史研究部)
(二〇〇二年五月一〇日受理、二〇〇二年七月二日審査終了)

Paper Monuments to the Loyal War Dead: Local Memorial Magazines to the Campaigners

ICHINOSE Toshiya

This paper examines the contents of "Memorial Journals of Men in Service" which were published in the various cities and villages before WW II. These memorial journals were created in large numbers mainly by the community posts of the Civilian Militia (Zaigo Gunjin Kai) after WWI with the highly political intention of reconfirming military servicemen's sense of *raison d'être* through recording and committing to memory past glories and making an appeal to society in this age of anti-militaristic peace-seekers.

The old soldiers who disclosed their memoirs of the Sino-Japanese and the Russo-Japanese Wars in these memorial journals took on the role of storytellers, telling stories of the heroic deaths of fallen soldiers and giving concrete detail to "memories" of war so as to draw sympathy from readers. This type of storytelling suited well the sentiment of the people who sought to find "heroes from their own hometown". When these old soldiers reminisced about their time in service, it is true they spoke also of horrible experiences, however they basically portrayed war as an opportunity to satisfy one's sense of honor. When these "stories" by the former servicemen were edited in their "hometowns", the editors avidly sought to make clear the positions and roles that these storytellers had occupied in the large sweep of history. This was done in order to make clear the "significance" of the deaths of those who died but, at the same time, it also was a way for the entire society to reconfirm and accept the values that war proposed to the state and to individuals.

Through the above process, the logic that Manchuria was, even before the Manchurian Incident broke out, land "paid for with blood" and that interests in the region should therefore be protected, as well as the threat of socialism and communism, were repeatedly confirmed at the endmost level of society, in the communities. It is well known that in order to gather the people's support, at the outburst of the Manchurian Incident, the military and the Civilian Militia emphasized the people's "memories" of the Russo-Japanese War. The various examples given in this paper offer insights on details as to when such "memories" began to be shared by the communities of the time.
